

日本浪漫歌謡大賞 受賞記念

2025年7月10日返子さざなみホールコンサート
昭和百年ジュン葉山祝賀公演

<ふろぐらむ>

Producer：濱野成秋

総合テーマ「愛する人のために生きる」

1st テーマ 女が涙を流す時

No.1 テネシーワルツ (昭和20年代～現代)

概説：ダンスパーティで恋人を紹介したら、あろうことか、その子に恋人を奪われてしまった！ そんな光景をめめめ語る、振られた女の子の歌。日本では終戦直後、進駐軍ダンスパーティで大流行。日本人も多数参加で。後に州歌に。民主主義とは陽気なアメリカ人との交わりからと学校の教室で復員兵も一緒に。

I was dancin' with my darlin' to the Tennessee Waltz

When an old friend I happened to see (SVO が OSV となった強調の倒置構文)

I introduced her to my loved one and while they were dancin'

My friend stole my sweetheart from me

I remember the night and the Tennessee Waltz

Now I know just how much I have lost,

Yes, I lost my little darlin' (and) the night they were playin'

The beautiful Tennessee Waltz (Repeat all again & again)

歌ったのは後にテレビの連載「サザエさん」役の江利チエミ。当時はそう上手

いとも言えなかったが、後に物凄く上達し節回しと心情の表出はカラオケ技法でいうと「音程、音色、強弱、上げ下げ」では追従をゆるさない。

作詞：P.W.King & R. Stewart 作曲：P.W.King

余滴：今回、ジュン葉山君が挑戦。どうしてもやらせてくれという。傷ついた女心を如何に掴むかでも上手くなったのでOKを出した。親の介護で、毎日へとへのジュン君だが、頑張ってテレビにも出るし演技も上手くなったから。

No.2 なぎさ橋ブルース (昭和90年代以降)

作詞：橘かほり 作曲：ジュン葉山 (Printed matters available)

公式：神奈川県逗子の浜辺は武男と浪子の『不如帰』で有名。「可愛浪さん僕の妻」と、伊藤久男と赤坂小梅が昭和11年に。この純愛物語は戦後も続いたが徳富蘆花の文学碑に訪れる人は今は少ない。テレサテンの「あなたの肌に爪を立てたい」とか「このままあなたの胸でくらしたい…」とか、激しく歌わせる作詞家たちにかき消された感がある。

ジュン葉山の「なぎさ橋ブルース」は久々に「悲恋の橋」を徹底しようと作詞された。ストーリーは妻子ある男を愛して好きでも添えない。必ず戻ってくると言って、それっきり。あなたがくれた「さくら貝」を掌(てのひら)に握って、ヒロインは涙ながらに、「もう帰って来なくていい、あなたは可愛い子たちが生き甲斐なのね…わたしは空っぽの貝殻なの…」と絶叫する。

余滴：ところでお気づきか、「なぎさ橋ブルース」の伴奏はフルオーケストラ仕立てになって再登場。管弦打が折り重なってヒロインの心境を醸す。ジュン葉山君は日テレの歌謡プレミアムで「南国土佐…」を晴れやかに歌い、この「なぎさ橋ブルース」でも分厚く妖艶に盛り上げている。後日談として登場したのが「御成町ブルース」で、舞台は逗子から鎌倉へ。そこで二人は結ばれるのか?『結婚は恋愛の墓場なり』と言うが。

No.3 学生時代 (昭和30年代～現代)

作詞作曲：平岡精二

公式：「学生時代」はよく「青学の歌」と言われるが、青学の学生はよく勉強するしミッションスクールだからチャペルにも自発的に行く。中に浸透している。

「ノートとインクの匂い…」は懐かしく、大学生の体験者が急増した現今、この歌は人生の中で最も輝かしい時代を言い当てている。

概説：かく申す筆者も青学の2部で15年間、米文学特講を担当した。150人の大教室での講義だった。プリントやパワーポイントを使わず、毎回、黒板に地図や作家名やキーワードや名文句を書いては消し、書いては消し、90分の講義の全時間、シネマスコープ型の黒板に所狭しと3回、消しては書きして、全部ノート取をさせ、質問を受け、また語りながらサブノートQ&A方式に書いて、全部覚えろとやるから学生たちに強いた知識量は大量だったが、彼らは実によく勉強していた。これが現実の青学の「学生時代」の勉学風景であった。

余滴：講義は150人教室で、最前列の2列はいつも都内の大使館や領事館から来た研修教育の、大人の学生さんたちで、彼らが実に熱心だから、その後ろの学生諸君も良く勉強に励んだ。終わって渋谷で夜食も沢山ついてきた。葉山の砂浜で日女大の英文学科の学生も加わり、総勢200人余。全員で「学生時代」の歌を歌ったことも。だから、いつ聞いても、うるうる…あんな日々が現実にあったのだと懐旧の思いひとしおである…。

No. 4 Besame Mucho (昭和30年代以降)

公式：この歌は1940年、日米開戦の前年にメキシコのコンスエロ・ベラスケスによって書かれた楽曲で「わたしにもっと、もっとキスしてえ！」という、凄い情欲のあふれ返った歌である。英語訳では、Kiss me much. Kiss me a lot. Kiss me again and again. 当初はギターとハープがバックアップしていたが、トランペットも情欲を掻き立てるし、編曲の果てに、ドラムとサックスが序奏を弾き出すのもある。コンスエロはこの時点でまだキスの経験がないのに書いた、という逸話があるが、Nobody can tell.である。

温談：昭和30年代後半、「ベサメムーチョ」が流行っていた学生時代、今も仲間の森本毅郎は銀座「タクト」でハワイアンを、僕は新橋「ショウボート」でディックミネさんの前座を、ジュン葉山君は時代が20年下って、銀座の「スイング」で本場のジャズソングや、この「ベサメムーチョ」を歌ってバイトしていた。が、今もって歌で食ってるのはジュン葉山君だけである。本日は彼女の恩師、ベースの大家の根市タカオ氏のご臨席のはず。また吾等の尊敬する古賀政男師のご家族もおみえになるはず…

No.5 Kamakura Lonely Love (昭和90年代以降)

作詞作曲：ジュン葉山

公式：愛はイニシエの昔から。男女の愛、孝養の愛、姉妹兄弟の愛から愛国、愛社、愛欲、情愛、郷土愛。愛には対象が不可欠。自己愛も愛他主義も愛の一つで、偏向した愛と取り組んだ作家たちは多い。谷崎文学の盲目の世界を描いた「春琴抄」には、盲目の春琴を愛するがあまり、自らも盲目（めしい）となる恋人の偏愛を描く。この自虐性は三島の『金閣寺』に見る破壊型とは対照的。

Kamakura Lonely Love もその一つで、浪漫の耽美主義をこよなく愛して追求したならば、かく申す純愛にいたる。その愛の形象を謡うジュン葉山自身が作詞作曲する究極の愛情物語といえる。

ジュン君余談：アドリブ追加。

No.6 The End of the World (昭和100年の後半)

公式：愛はイニシエの昔から、と前曲の冒頭で言ったが、失恋もイニシエの昔からあって、失くした傷心を抱える日々はこの世の終わりだ。たとえ娘っ子が恋人に振られても、森羅万象はそんなこと知らんぷりして動いてる。なにもかもが終わりね、あなたが去ってしまうと。この世は終わりなのに、周りは解かってくれない。こんな心境は失恋ばかりではない、入学試験に、あれだけ夢中で挑戦したのに、見事、振られて、今年も浪人、となった少年も同じ心境か？

筆者は大型の失恋をしたことがない。だが挑戦して夢を求めて何年も努力して、実らなかったことはいっぱいある。だが「世界の終わり」とは思わない。再挑戦したら、上手くいった。人生、七転び八起ではない。7000 転びの 8000 起きだと思い直して頑張れば、若い時分の 15 戦全敗など、何の痛手でもない。

だが恋愛感情は違う。そこんところが romanticism と pragmatism との相違点である。恋人に振られるというのは、かったるい、生きてるのも嫌になる。

余談：この歌はブレンダ・リーも唄えば八代亜紀も歌う。みな上手い。が大スターが唄っては、合わない。傷つきやすい乙女が唄うから、胸キュン時代を思い出し、愛の告白をし損ねた思春期を思い出して、まだ動いている動悸にそっと手を当てるのである。ジュン葉山君もまた可憐で傷つきやすいから持ち歌になっているのであろうと思うが…。

No.7 南国土佐を後にして

公式：これは今は亡きペギー葉山さんの持ち歌である。本年6月23日午後9時からの「日テレ歌謡プレミアム」では吾等のスタージュン葉山君が唄わせて頂いた。この、南国土佐の豪快さを謡う唄は、実はペギーさんが唄う前、戦中、土佐出身の帝国陸海軍の兵隊さんたちから自然発生した歌だという。

豪快だが、いささかならず、お色気も感じる。いや、筆者は濃厚に感じる。「ゆうたちいかんちゃ、おらんくの池にゃ、潮吹く魚が泳ぎよる…」の、言うたらいかん（秘め事じゃから）と言うけれど、なぜ口止めされるのか。その前句、「私も負けじと励んだあとでえ～」とは、思わせぶり。「おらんくの（自分ちの）池にゃ、潮吹く魚が元気に泳いでる」なんて、さすが、はりまや橋で坊さんが「カンザシ買うのをみた」と洒落る土佐っ子である。

ジュン君余談：この話はジュン君にはしておりません。怒られるだけですから。日テレ本社スタジオでは、ジュン君、まったく危なげなく歌いきり、撮り直し無しの満点撮影でした。土佐の皆さまも大変な歓声ぶりでした。感謝、感謝。

No.8 どじょっこふなっこ（昭和30年代以降）

作詞：橘かほり（濱野成秋） 作曲ジュン葉山

公式：田舎育ちは幼いうちから、小川にはいって、泥鰌だの、鮒など日がな一日獲って遊ぶ。この思い出を共有する仲間は大になっても、ちゃん付けで呼び合う親近感をもつ。上京して職場は別々でも、会っては飲んで、食べて。

この歌はそんなある日に電話を貰って、「仲間の誰それが結婚するから、披露宴で君と歌を一緒にやろう」となるところから。

友人の結婚はある意味、ショックの日で、独身同士、じゃあ結婚するかと、マッチングが芽生えることも。東北地方から中卒で就職列車で上野駅に。ボストンバッグ片手に夜汽車で来た子たちは上野駅に降り立つ。彼らは「金の卵」と呼ばれて期待されるが、大都会の環境になじめず、田舎恋しで、夜など布団に入ると涙、涙。でも歯を食いしばって頑張り、同郷同士、「若い根っこの会」を作った。その数、東京では何百とあった。

あれから70年、今では立派な商店主だが、歳も80歳から90歳に。そんな大先輩の孫世代のところに、まだ二十歳そこそこの子もいる。彼ら彼女らも、同

郷同士、結婚の話となると、村の小川で、どじょっこみたいな小っちゃいのをぶら下げた、あの子を思い浮かぶ。だのにこの子はただ歌と一緒に歌おうだって！そんなの許せない！ 田舎生活が大都会でも縋い交ぜになって思い出す…さてどうなりますか、コミカルなリズムと共に拍子をとって一緒にそうぞ。

余滴のしめくくり

日本浪漫歌謡大賞受賞を祈念して、今回は特にご縁の深いペギー葉山さんを偲んで、昭和にある、切り取られた数十年が浮かび出るように心がけました。自分にも今はまぼろし、という思いで聞いて頂けたら、嬉しいです。

ペギーさんは青学でも僕とデスクを並べたことはない。大学にこそ来なかったお人ですが、森繁久彌さんと3人で、「屋根の上のヴァイオリン弾き」をまたやろうと相談したり…。当時、キャンパスでは、狂言の和泉元彌さんも何度も遭った。彼はまだ大学生で、その頃から年間200回以上も講演をしていた。青学で卒業単位を全部取得するのに8年もかけて卒業した。

先日、かれは円覚寺の佛日庵で公演なさったし、ジュン君ともコラボをしてくれた。「永らえば またこの頃や偲ばれむ 憂しと見し世ぞ 今は恋しき」。

ペギーさん、森繁さん、この方々とも、もう会う日々も、絶えて、ない。総てがまぼろしであります。昭和は終わったが、平成で繋がって、私たちに躍り込んできて来る。すごい。千年後でもぶり返すか、この100年間は。私たちは慎んでこの激動の100年史にエールを送りたい。

このたび、銀座のジャズ界のヴォーカリストでその名を知られたジュン葉山が「日本浪漫歌謡大賞」を受賞しました。

上記のプログラムはそれを記念して、7月10日に逗子市さざなみホールでコンサートを致します。唄う曲目はほかにも沢山ございますが、上記はその前半分を概説したものです。後半部分は来て頂いて配布するプログラムに入れます。取り急ぎチケット前売り中です。お早めにお電話で受け付けますので、下記にご連絡ください。

連絡先：090-2735-7495

アカデミア・インターナショナル